

■ 特集「未来」

「未来」とキャリア教育

浦上昌則

(南山大学人文学部)

近年のキャリア教育が、職業に関する社会的問題への対応として注力されていることは各所で指摘されるところである。もちろん、キャリア教育には職業関係の重要性があるが、それだけが重要なわけではない。

キャリア教育の対象としては主に子どもたちが位置づけられるが、子どもたちは、各自の未来はもちろん、自分たち、すなわち未来の社会を作っていく主体として期待される存在である。未来の社会の担い手を育てる、未来のより良い社会を作り出す個人を育てるということも、キャリア教育が担う非常に大きな重要性だといえよう。それゆえ、未来に向けたキャリア教育のあり方について検討することは非常に重要である。本稿では、そのようなキャリア教育を検討する際の課題について検討してみたい。

未来の社会を考える

未来に向けたキャリア教育のあり方を検討する際に不可欠なのは、その未来を創造（もしくは想像）することである。付言するまでもないであろうが、その未来を実現させる一助として行うものがキャリア教育であるから、まずは未来を描くことが肝要となる。

では、今から20年後、すなわち2031年には、どのような社会の実現が望まれるだろうか。

もちろんこの問いへの回答は、誰が（どのような立場として）望むか、どのような方向を望ましいものとして前提に置くかという点から大きく異なるであろう。そのため、回答は多様なものになることが推測される。また、この問いは適切な回答を得にくい（問いと回答の間に乖離が生じやすい）、回答するのが非常に難しいとも言えるのではないだろうか。この回答の難しさの原因についてさらに考えてみたい。

話題は少し飛躍するが、著者が子どもの頃、科学マンガのようなものが子どもたちの身近にかなりあったような記憶がある。マンガといっても、子ども向けに科学技術が作り出す将来像をマンガで紹介するというようなものであった。時期としては1970年代頃と思うが、「21世紀にはこのような世界になる」というような夢のあふれる内容であったように覚えている。たとえば携帯電話やテレビ電話、立体映像、運転手のいない自動車のような移動手段、超高速の飛行機や列車、宇宙旅行、人間的なロボット、気象の人為的コントロールなどが実用化されている様子が描かれていた。

「2031年には、どのような社会の実現が望まれるだろうか」という問いに対して、このような技術の進歩・開発に関する回答がかえってくる可能性は大きいであろう。たとえば、「医療技術の進歩によって癌が撲滅されている」といった回答である。しかし、これは問いと整合性のある回答とは言い難い。技術の進歩した様相を描くことは、それ自体では社会を描いていることにならないからである。

医療技術がさらなる発展をみせ、癌が撲滅されれば、それは社会を変化させるであろう。しかし、医療技術の発展は、望まれる社会そのものではない。技術と社会の関係は、技術の進歩が社会を変化させる要因となるというものであり、望ましい社会の実現のための手段として技術を位置づけることが適切であろう。そうであれば、「2031年には、どのような社会の実現が望まれるだろうか」という問いに対して、技術の進歩に関する回答が返ってくるということは、目標を尋ねているのに手段に関する回答が返ってきたことになる。これでは問いと回答が整合しているとはいえない。

ではどういう回答が整合性のある回答といえるのであろうか。もちろん、社会について問われているので、「〇〇な社会」という回答が最も整合的なものと考えられる。ところが、この「〇〇な社会」の「〇〇」をイメージすることはかなり難しいのではないだろうか。「平和な社会」、「格差のない社会」、「世界に開かれた社会」などという表現は出てきそうであるが、あまりにもありふれた、漠然とした理想のため、あえて回避されるかもしれない。これまでに指摘されていない新しい社会をイメージすることは、相当に難しいことなのかもしれない。

こういった難しさの原因には、「社会」という概念の特徴が反映されていると考えられる。「社会」という用語は、現在ではありふれたものといえるであろうが、「社会」という言葉の意味を適切に理解している日本人はそれほど多くないとも考えられる（たとえば阿部，1995；浦上，2009）。

「社会」という言葉は、齋藤（1977/2005）が述べているように society に対応する訳語として明治初期につくられたものである。そのため基本的には、「社会」とはsocietyが意味するもの、すなわち個人の集合体、個人のつながり方のことを指す。またこれは、「社会」という概念と「個人 (individual)」とい

う概念は切り離すことができないことも示している。

この意味内容を踏まえると、「〇〇な社会」の「〇〇」の部分には、望ましい個人の集合体の様相、望ましい個人間のつながり方を形容するような内容が表現されるべきであろう。またより詳細な表現を目指すならば、望ましい個人のあり方も含められるべきといえる。たとえば「平和な社会」とは、個人（もしくはその社会の下位集団）が他の個人（下位集団）とかかわる際に暴力や武力を使わないような集合体のことを指すと考えられる。しかし、個人（や下位集団）が暴力や武力を使わないという状況は、個人が使ってはならないと考えているためとも考えられるし、何らかの圧力等によって使えないような環境にあるためとも考えられる。「平和な社会」というだけではどちらの状況を指すのかが不明確になるため、詳細な表現を目指すならば、望ましい個人のあり方も含めるべきと考えられる。このように考えると、「〇〇な社会」の「〇〇」をイメージし表現することは、簡潔にまとめるとありふれた表現になり、新しいものを考えようとするときと相当に複雑な思考が求められるため、いずれにしても難しいことととらえられるのではないだろうか。

さて、ここまででは未来に向けたキャリア教育のあり方を検討する際には、未来を創造（もしくは想像）することが不可欠であるが、その創造（想像）は難しいことを指摘してきた。もちろん、難しいという理由からそれを考えずにキャリア教育を行うことは大きな問題である。「どのような社会になってもかまわないが、キャリア教育は行う必要がある」というような乱暴な議論をしてはならないし、ましてや「社会とはよくわからないものだから横に置いておいて」というような態度はもはや教育と呼ぶべきではないであろう。この難しい部分を越えなければ、未来に向けたキャリア教育を検討することはできないと考えられる。

「我々」の未来に向けたキャリア教育

未来に向けたキャリア教育のあり方についてさらに議論を深めていくために、以上のような難しい問題を越えていかなければならない。以下では、それに向けた2つの私見を提示してみたい。

そのひとつとして、まずはキャリア教育を行う者が「社会」と「個人」という概念をしっかりと理解することから始めなければならないだろう。もしこれらの概念を適切に理解していなければ、未来の「社会」、よりよい「社会」を創造するキャリア教育を考えるということは不可能である。

先にも触れた齋藤（1977/2005）によると、「社会」は明治10年ごろ、「個人」は明治17年ごろに訳語が定着したと考えられ、それまでには何年もの時間と試行錯誤が費やされている。このような時間と試行錯誤を必要としたのは、もちろんそれ以前の日本にそのような概念が存在しなかったためである。当時は、知識人が欧米には「同質平等な個人とそれら個人のつながりとしての社会とい

うもの（齋藤，1977/2005，p.185；傍点は齋藤による）」が存在すると考え始めていたという程度であった。それまでに出会ったことのない概念を理解し翻訳すること、またそれが人々の間に定着していくことの困難さは想像に難くない。それゆえ長い時間と試行錯誤を必要としたという点は納得できる。

現在では、「社会」も「個人」も言葉が作られ百数十年が過ぎたことで、一般的に用いられているといえる。ところが、先人のようにsocietyやindividualという概念を追究することによって理解しているわけではない。また一般的になったことで、その言葉に説明が付されることもなくなり、結果としてどこかで明確な定義を学ぶ言葉でもなくなっているといえよう。そして、メディア等で見聞きする際の印象から、感覚的に意味を見だし自分なりの定義として理解しているのが現状ではないだろうか。

以前にも別稿（浦上，2009，2010）で触れたが、「社会」や「個人」という言葉（概念）は、よく耳にし、また何となく意味はわかるものの、はっきりとはわからないものになってしまっていることがキャリアを考える上での障壁となっているのではないだろうか。このような状況を生み出さないためにも、キャリア教育に関わるすべての者が、個人は社会の中で人生を送り、また社会に寄与し、社会の恩恵を受けて人生を送るという最も基本的な枠組みを理解した上で、未来の社会について議論することが不可欠と考える。

次に、以上の指摘を無に帰すことにもつながりかねないが、「我々」の未来に向けたキャリア教育を考える上で重要と考える点について触れておきたい。それは、我々日本人は、「個人」として「社会」を形成し、その中で人生をおくっているのかという問題である。

たとえば阿部（1995）は、現在でも西欧のsociety、individualという概念、すなわち「社会」や「個人」は、日本に定着していないと指摘している。阿部は、西欧の学問や技術を輸入しようとして「社会」などといった訳語（言葉）を作ったものの、それは単に形式的なものに留まってしまったと分析している。そして、背景にある哲学や世界観をもたず、形だけの模倣であったためうまく輸入することはできたが、我が国一般の人々の意識には影響を与えず、人々はその後古来の「世間」の意識で生活してきたと指摘するのである。

阿部（1995）のいう「世間」とは、「個人個人を結ぶ関係の環」であり、「個人個人を強固な絆で結び付けている。しかし、個人が自分からすすんで世間をつくるわけではない。何となく、自分の位置がそこにあるものとして生きている」と表現されている。また、「自分の加わっている比較的小さな人間関係の環」、「社会よりも具体性をもつ」、「世間は所与のものみなされる」、「個人は世間との関係の中で生まれている」などという説明もみられる。そしてこれらは、society（社会）と「世間」が大きく異なっていることを示している。

現在の主要なキャリア理論はそのほとんどが欧米で作られたものであり、その背景には「社会」や「個人」という概念が存在している。それゆえ、それら

の理論を我が国で適用するには、我が国でも「社会」や「個人」という概念が理解され、共有されていることが前提となるだろう。もし阿部（1995）の指摘が不正確であり、百数十年の時間が我が国に「社会」や「個人」という概念を定着させ、現在の人々はその中で生活を営んでいるのであれば、欧米のキャリア理論は十分に適用できるだろう。ところが阿部の指摘が正確であり、我が国の人々は現在でも「世間」で生活しているのであれば、前提が異なってくるので欧米のキャリア理論の適用には慎重でなければならない。もしそうであるならば、何よりも「世間」の中で生きることを記述する我が国のキャリア理論を新たに構築することが必須となるだろう。

ここで行った2つの提案は、前者は我が国にも「社会」や「個人」が根付いているが、現在ではそれらに対する自覚、理解が乏しくなっているという前提である。後者は、輸入された「社会」や「個人」は我が国には根付かなかったという前提である。著者自身、まだいずれの前提がより適切なのかを判断できずにいるが、昨今の情勢を眺めていると、後者のスタンスの方が適切なのではないかという印象を強めている。しかし、鴻上（2009）などのいう、我々は「社会」と「世間」のダブルスタンダードを生きているとする立場についてもさらに検討する必要があるだろう。未来に向けたキャリア教育を検討していくためには、「我々」を知ることがまだまだ不足しているのかもしれない。

引用文献

- 阿部謹也 1995 「世間」とは何か 講談社現代新書
鴻上尚史 2009 「空気」と「世間」 講談社現代新書
齋藤 毅 2005 明治のことば - 文明開化と日本語 - 講談社学術文庫（オリジナル刊行 1977）
浦上昌則 2009 下村・白井・川崎・若松・安達論文へのコメント - 「社会」という言葉に着目して - 青年心理学研究, 20, 101-108.
浦上昌則 2010 キャリア教育へのセカンド・オピニオン 北大路書房